

薬が合わない？

医師は、ない知恵を絞って、患者さんに薬を出す。が、簡単に、「飲みたくない」と捨ててしまう人だっている。

75歳のMさん。5年前に、左の手足が麻痺した。脳の血管が詰まって起きた脳梗塞である。以来、血液サラサラにする抗血小板薬をのんでいる。ある日、「同じ薬で、脳梗塞が再発した人がいる。薬には、出血し易い副作用もあるという。もう、やめたい」とおっしゃるではないか。

でも、医師は、抗血小板薬には、出血の危険性を上回るだけの再発予防のメリットがあるので処方している。確かに、効果のほうは、いまいちだ。ある報告によれば、ひとりを守防するために必要な投薬患者数は、約3年間の観察で26から28という。つまり、投与した26～28人にひとりだけが利益をこうむるといふ。

で、なぜ抗血小板薬の効果に限界があるのだろうか？薬を飲んでいるのに、脳梗塞が再発するワケは？などと、頭を悩ませます。が、なんのことはない。薬を飲む前に、す

でに脳の血管がポロポロになっていたとすれば、より血栓もできやすく、血管も詰まりやすいではないか。薬だけ飲んでいるだけでは、脳梗塞の再発は避けにくいということになる。かといって、薬をやめれば、血栓の危険性は増すだけである。

ところで、血管ポロポロの危険因子は、加齢、高血圧、脂質異常症や糖尿病などである。Mさんは、もともと高血圧で降圧剤を飲んでいる。が、年を取ることは避けられない。「転ばないように足腰を鍛えて、サラサラの薬を続けたほうがベター」と話したが、どうなることやら。

脳梗塞は、10年で約半数の人に再発がみられるという。にもかかわらず、4人にひとりとは、自己判断で服薬しなくなる。Mさんのように、医師に相談してくれる人は、まだまだである。

(石黒修三||いしへろクリニック・脳神経